

【書 評】

社会認識教育学会編 『社会科教育のニュー・パースペクティブ』

(明治図書, 2003) 2,600 円

藤 井 千 春

(早稲田大学教育学部)

本書を企画するにあたっての「強い願い」について、次のように述べられている。

「二〇世紀型社会科を脱構築し、二一世紀型社会科に新たな挑戦性を付与したい。」

本書では、社会認識教育学会のそうそうたる執筆者によって、「新しい状況をもふまえて、社会科の存在意義とあり方を問い直し、『変革と提案』をキーワードに社会科教育のニュー・パースペクティブを描く」作業がなされている。次のようなプロットと執筆者によって構成されている。

- I 二一世紀社会科の挑戦
(森分孝治, 岩田一彦, 片上宗二氏)
- II 新しい社会知にもとづく社会科
(池野範男, 溝口和宏, 服部一秀, 森田真樹氏)
- III 新しい科学知にもとづく社会科
(棚橋健治, 草原和博, 梅津正美, 桑原敏典氏)
- IV 新しい学びにもとづく社会科
(今谷順重, 木村博一, 寺尾健夫, 加藤寿朗氏)
- V 新しい内容知にもとづく社会科
(金子邦秀, 松尾正幸, 猪瀬武則, 原田智仁, 谷本美彦氏)
- VI 新しい方法知にもとづく社会科
(中村哲, 森本直人, 福田正弘, 戸田善治, 岡明秀忠氏)
- VII 生涯学習としての新しい社会認識教育
(小原友行, 藤田詠司, 吉川幸男, 谷口和也, 宮本光雄氏)

各論文は、各章のテーマに基づいて、いずれもそれぞれの執筆者の現在の問題意識が明確に打ち

出されている。しかも、それぞれの執筆者がこれまでに追究してきた領域での研究結果が、十分にふまえられている。各論文は、「社会科教育のニュー・パースペクティブを様々な側面から」描いたものとして、きわめて刺激的で興味深い。「社会科教育のニュー・パースペクティブを描き」、「変革」のための「提案」を行なった書として、高く評価することができる。

ただし、「二〇世紀型社会科を脱構築」するための論点を提起するという点では不徹底である。「脱構築」をめざすならば、リチャード・ローティが近代の認識論哲学に対して行なったように、「脱構築」されるべき対象の前提的枠組みを明確にし、その無効性・現代的不要性を論証する作業が必要となる。「二〇世紀型社会科」の前提的枠組みは何だったのか。また、その前提は二一世紀において、なぜ、どのように無効であり、不要であるかを、よりラディカルに論じる必要がある。しかも、それが単なる社会科不要論や解体論とは一線を画する論理であることが期待される。

例えば池野氏は内容編成原理について「(国民)国家を核にし」と指摘している。このような点の分析・考察を深める必要がある。「二〇世紀型社会科」の前提的枠組みは、「国民国家」における「国民教育」としての「公教育制度」にある。この前提的な枠組みを批判的に再討論して解体の必要性と可能性を論証する作業が、「二〇世紀型社会科」の「脱構築」である。評者は森分氏のこれまでの研究には、このような前提的な枠組みを明確化する論点が内在していると認識している。

なお本書は、森分孝治氏の広島大学大学院教育学研究科教授ご退官の記念の企画でもある。氏のこれまでの研究業績に心より敬意を表するとともに、今後のご研究のご発展を祈りたい。